

『狂歌桃のなかれ』書誌・影印・翻刻

中野眞作

はじめに

『狂歌桃のなかれ』は、桃縁斎貞佐の高弟、三次の星流舎貞石が晩年、広島・石丈蘭芝郷の序文、庄原・連雲斎貞棧の跋文を得て、寛政五年六月に大坂の柏原屋清右衛門から公刊した。書名は、師桃縁斎の流れをあらわす。

現存する板本は、実践女子大学図書館蔵本のみであり、写本も慶応義塾図書館蔵本と広島大学大学院文学研究科日本史学研究室蔵本だけである。

寛政期の芸備狂歌壇を知る上で有用な資料と考え、「実践女子大学図書館蔵本」を影印・翻刻し、写本は、書誌のみを記した。

書 誌

○板 本

○実践女子大学図書館 蔵本

書型 半紙本 一冊。袋綴。縦二十二・九糎×横十六・二糎。

表紙 原表紙、錆浅葱色無地。

題簽 原題簽、中央、白色無地、「狂歌桃乃奈可礼」、縦十六・八糎×横三・五糎。匡郭なし。

内題 「狂歌桃乃なかれ」(一才)。

構成 四十一丁。うち、口絵(巻頭歌)半丁、序文二丁半、三十七丁半、跋文二丁、奥付半丁。

板心 (丁付)「口絵・序」一一、二、「本文・跋・奥付」一一〇廿九。

匡郭 なし。

挿絵 口絵―墨絵(「口絵」一才)、挿絵―墨絵・片面六図(四ウ、十七才、廿九才、三十ウ、卅三才、卅六才)、見開き三図(十ウ―十一才、二十ウ―廿一才、廿三ウ―廿四才)。

広告 なし。

刊記 寛政五癸丑五月

心齋橋順慶町
浪華書肆 柏原屋清右衛門 (廿九ウ)。

印記

「實踐女子大／學圖書館印」「朱文橢圓朱印」(「口絵」一才・右上)・「口壺亭」「朱文角朱印」(「口絵」一才・右下)・「口翠」「白文角朱印」(「口絵」一才・右下)・「連雲齋」「白文角朱印」(廿九才・左下)・「貞棧」

識語

樋口三郎広忠／三郎「墨書」(表紙見返)。

編者等

編者 星流舎貞石

序者 石丈蘭芝郷

跋者 連雲齋貞棧

画工 不詳

○写 本

I 慶應義塾図書館 蔵本

書型 半紙本 一冊。袋綴。縦二十三・八糎×横十五・二糎。

表紙 保護表紙、白色無地に柿渋色の格子模様。

原表紙、白色無地。

題簽 書題簽、左肩、白色無地、「狂歌 桃乃流」、縦十四・〇糎×横二・九糎。匡郭なし。

内題 「狂歌桃乃なかれ」(一オ)。

構成 四十二丁。うち、口絵(巻頭歌) 半丁、序文二丁半、三十七丁半、跋文二丁、奥付半丁。

板心 (丁付)「口絵・序」一、二、「本文・跋・奥付」一〇十七・十九・十八・二十〇廿八。

匡郭 なし

挿絵 口絵―墨絵(「口絵」一オ)、挿絵―墨絵・片面六図(四ウ、十七オ、廿九オ、三十ウ、卅三オ、卅六オ)、

見開き三図(十ウ―十一オ、二十ウ―廿二オ、廿三ウ―廿四オ)。

広告 なし

刊記 寛政五癸丑五月

心齋橋順慶町
浪華書肆 柏原屋清右衛門 (奥付)。

印記 「野崎左文氏遺書／門野重九郎氏寄贈／昭和十年十月下旬／慶應義塾圖書館」[朱文長方角朱印](表紙右

上)・「菅氏」[白文角朱印](表紙右下)・「蟹のや印」[朱文角朱印](表紙左下)・「竹浦」[朱文角朱印](表

紙見返中下)・「竹浦寫本」[朱文長方角朱印](「口絵」一オ・右上)・「連雲齋」[朱文角朱書印](「卅九オ」

左下)・「貞棧」[朱文角朱書印](「卅九オ」左下)・「汲泉玉柏」[朱文角朱書印](奥付右下)・「菅」[朱文角

朱印](奥付左下)。

識語 「昭和十乙亥年二月臨模了／野崎先生惠存／菅竹浦 印」[墨書](表紙右)。

「一 原本ところ／誤寫ありたとへばをとことあるへきをおとことし、ひとすへきをいとしたるか如き假

名遣の違ひといはすもあれ其外てをくとし日を月に誤りたるが如き例さへあり明かに誤記と見ゆるところには朱字にて上部の空白二訂したれとも其他は元本のまゝとなしつとめてもとの面影を留むること二注意したり／一 原本二題簽なく今假りに序文中の文言より集字して附し置きたり／竹浦樓主人識 [印] (表紙見返)・「昭和十乙亥年二月旬二紀元節後一日寫了／竹浦樓主人 [印] (奥付左下)。

編者等 編者 星流舎貞石

序者 石丈蘭芝郷

跋者 連雲齋貞棧

画工 不詳

II 広島大学大学院文学研究科日本史学研究室 蔵本

書型 半紙本 一冊。袋綴。縦二十三・九糎×横十六・九糎。

表紙 原表紙、赤褐色無地に蜀江錦空押し模様。

題簽 書題簽、左肩、白色無地、「桃の奈(欠)」。匡郭は子持ち枠の木版刷。

内題 「狂歌桃能奈可禮」(四才)。

構成 五十一丁。うち、序文一丁半、四十七丁半、遊紙一丁。余紙一丁。

丁付 なし「便宜上 一才・二才」と記した。

印記 「広島大學圖書之印」「朱文角朱印」(一才・中上)・「広島大學圖書之印」「朱文長方角朱印」(四才・右上)、

他。

編者等 星流舎貞石

序者 石丈蘭芝郷

備考 板心・匡郭・挿絵・跋文・奥付なし。

板本の十六丁表・裏を三十六丁表・裏に反復筆写している。

板本の廿一丁裏の狂歌と吾浮の詞書を欠く。

三十六丁表～四十九丁表までは、信海、貞柳などの狂歌を筆写している。

五十丁表～五十一丁表までは、芭蕉、其角などの発句を筆写している。

(凡例)

一、平かな・カタカナは、すべて現行の字体に改めた。

二、漢字、略字、異字体は、原則として現行の漢字に改めた。

三、特殊な合字は現行の字体に改めた。

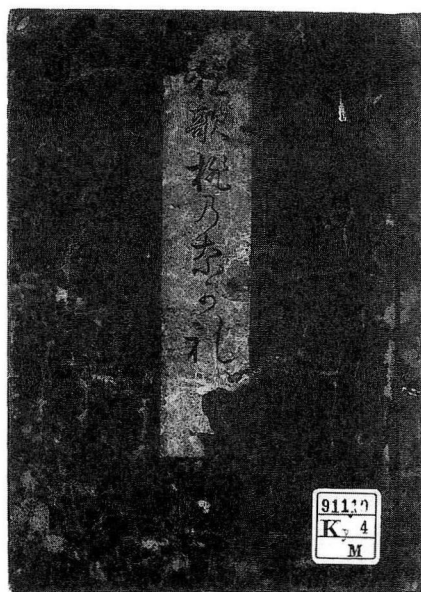
四、反復記号は、原則として底本に従ったが、漢字一字の反復記号は「々」に改めた。

五、行移りは、底本に従わなかった。

六、丁移りは、各丁の表および裏の末尾に（一オ）・（二ウ）を付して表した。ただし、（廿一オ）などは（二十一オ）とした。

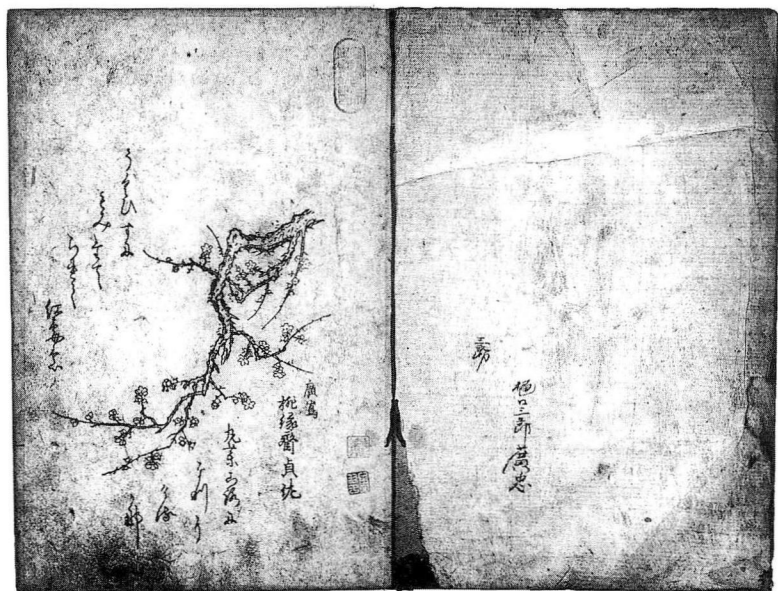
○影
印

○底本 実践女子大学図書館 蔵本



○翻
刻

「狂歌桃乃奈可礼」(題簽)



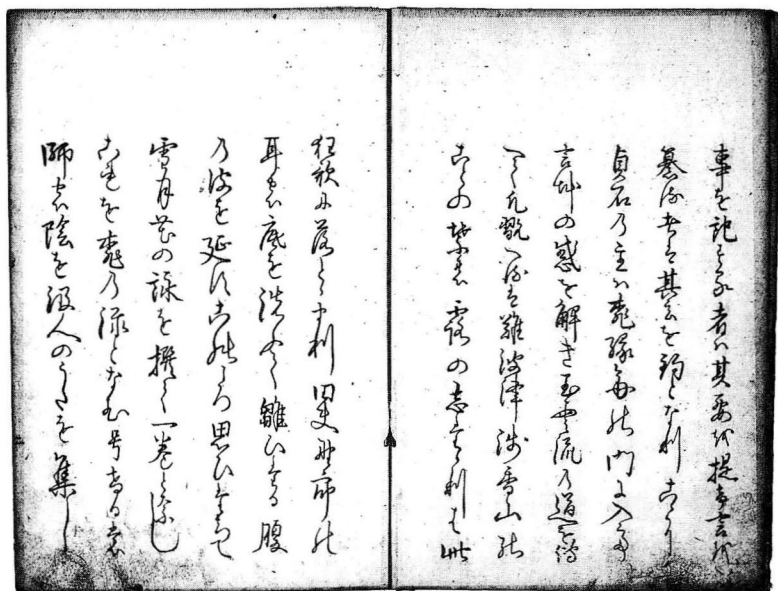
樋口三郎広忠／三郎〔墨書〕

〔表紙見返〕

うくひすにもみたてられて紅梅の丸葉ころになりけるかな

〔口絵〕一才

広島 桃縁齋貞佐



事を記する者は其要を提て言を纂る者は其言を鉤となりこゝに貞石の主は桃縁斎の門に入て言草の惑を解き玉雲流の道を伝へて凡翫へるは難波津浅香山のことの葉の露のしたゝりは此

〔序〕 一ウ

狂歌に落とまり田夫野郎の耳の底を洗ふて雛ひたる腹の皮を延すこのころ思ひたちて雪月花の詠を撰て一卷となしこれを桃の流となむ号けるも師の陰を汲人のうたを集し

〔序〕 二オ

名なるを（予）げ先のまゝをとり
いなめもゆかふはをなれ電
を揮てたろもゆかふをなれ
かふもすくもははるるもなれ
なり（予）

石丈蘭芝郷書

狂歌桃のなかれ

春

歳旦

三次

星流舎貞石

伯樂は出すともうれし春風に梅の千里の能を知る今朝

廣島

柳縁齋貞國

いづつ年の葉もみな和歌めくや今朝は見るもの聞く物につれ

三次

史兆

さら〜と天地ひらけてかけ物の絵は空ことに初日めてたや

甲立

千歳園秀葉

蓬葉は年の頭のものしやとて人もつむりにいたゝきにけり

名なるへし予はしめの言葉を与ふ

いなめともゆるさすつたなき毫

を揮てそのもとめにした

かふもまたともにつらるゝもの

なりけらし

石丈蘭芝郷書

〔序〕二ウ

狂歌桃のなかれ

春

歳旦

三次

星流舎貞石

伯樂は出すともうれし春風に梅の千里の能を知る今朝

広島

柳縁齋貞國

いづつ年の葉もみな和歌めくや今朝は見るもの聞く物につれ

三次

史兆

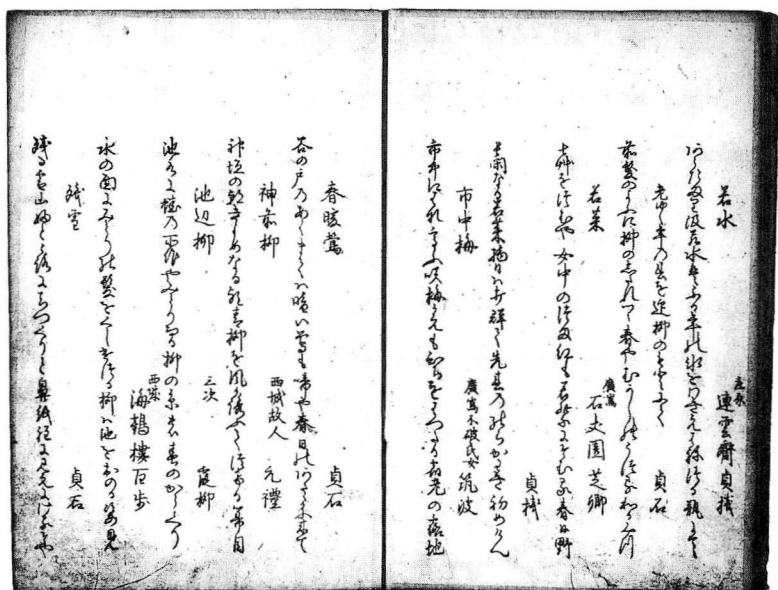
さら〜と天地ひらけてかけ物の絵は空ことに初日めてたや

甲立

千歳園秀葉

蓬葉は年の頭のものしやとて人もつむりにいたゝきにけり

（一オ）



若水

庄原 連雲斎貞棧

あらたまり汲若水はふる年の氷をわきえはねつる瓶にて

老ゆく年の春を迎柳のもとにて

前髪によふに柳のしたれつゝ春やむかしのうつるわかみつ

若菜

広島 石丈園芝郷

喜をつむや女中のつま紅も若紫にそむる春日野

貞棧

長閑なる若菜摘日は打群て先春ののらかわき初めけん

市中梅

広島不破氏女

筑波

市中にはな高ふ咲梅かえもひちをはつたる宿老の露地

(一ウ)

春暖鶯

貞石

谷の戸のあくまでは睡い鶯も啼や春日のあたゝかに来て

神前柳

西城故人

元礼

神垣の朝きよめなるか青柳を風か誘ふてつける箒目

池辺柳

三次

霞柳

池水に蛙の所作やみとりなる柳の糸の春のからくり

西城 海鶴樓百歩

水の面にみとりの髪をくしけつる柳は池をおのか姿見

残雪

貞石

残る雪山ふところにしつくりと鼻紙程に見えにけるそや

(二オ)

休寒

廣島

流水

あやぐりやぬりを取めて又きさらきや寒かへる空
涅槃會 土師 紅雲軒花曉

華の世をしのむの年かやさめくとなくもの、お、さよ

塗池臘月

竹習

春の夜をぬくひうるしか臘なる月も宿かるぬり池の内

臘夜田樂

試杖

臘夜の空はあやなし田樂のいろこそ見えねまつは喰る、

霞中船

尾道 明代堂忠甫

わらんへの遊びに似たりこき後を舟も霞にかくれんほして

井蛙

宮島

桃栄

飛あき外をもみつに手をついて蛙は何をへつ、いのうち

色里蛙

廣島小川氏女

其扇

蛙らもうかれ出口の柳陰一寸飛へはまた二すんとぶ

蕨を取に誘はれて

貞石

折とるはゆるし色かや紫のちりの積れる山をあらせと

春雨帰雁

庄原

沙乗

ふらや雨に濡ても急くらん料理のかれて帰る雁金

全故人

凌宵

行雁の名残は空にしられけり棹になる間もはれぬ春雨

余寒

廣島

流水

あた、かと一ツぬいたを取あけて又きさらきや寒かへる空
涅槃會 土師 紅雲軒花曉

夢の世をしめす姿のねはん会やさめくとなくもの、お、さよ

塗池臘月

竹習

春の夜をぬくひうるしか臘なる月も宿かるぬり池の内

臘夜田樂

浪花

試杖

臘夜の空はあやなし田樂のいろこそ見えねまつは喰る、

霞中船

尾道

明代堂忠甫

わらんへの遊びに似たりこき後を舟も霞にかくれんほして

井蛙

宮島

桃栄

飛あき外をもみつに手をついて蛙は何をへつ、いのうち

色里蛙

廣島小川氏女

其扇

蛙らもうかれ出口の柳陰一寸飛へはまた二すんとぶ

蕨を取に誘はれて

貞石

折とるはゆるし色かや紫のちりの積れる山をあらせと

春雨帰雁

庄原

沙乗

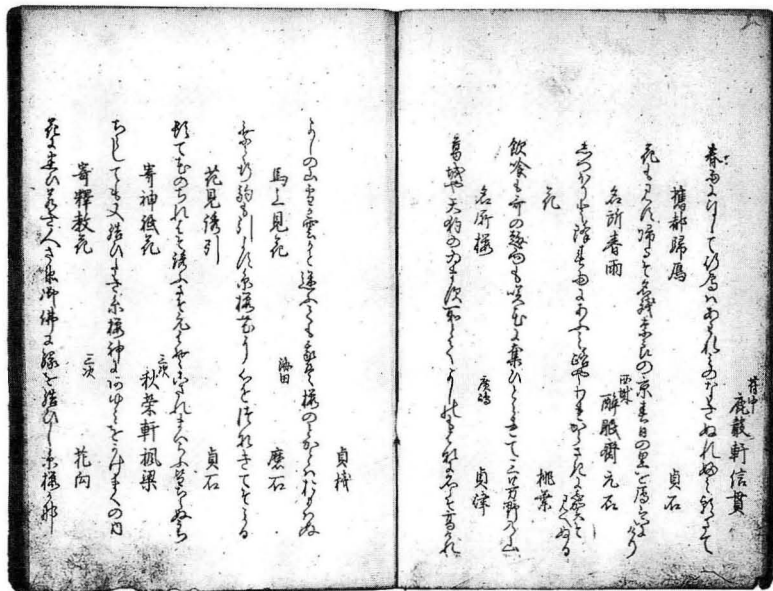
ふらや雨に濡ても急くらん料理のかれて帰る雁金

全故人

凌宵

行雁の名残は空にしられけり棹になる間もはれぬ春雨

(三才)



府中 鹿声軒信貫
春雨になして行雁はあわれみのなきぬれふみ朝さて
貞石

旧都帰雁

花も見す帰るそ名残奈良の京春日の里を雁はいにけり

名所春雨

しつほりと降春雨にあふみ路やわれからさきに志賀そ見へぬる
桃葉

花

飲喰も歌の趣向も咲花に奪ひとられて三芳野の山

名所桜

葛城や天狗のゐます所とてよしのものはなに名こそ高けれ
(三ウ)

貞律

よしの山雪か雲かと迷ふても我は桜のことかとはおもはぬ
貞棧

馬上見花

乗て行駒も引よす糸桜花に心をつなきてそみる
海田

花見誘引

頓て花のちれはそ誘ふさそえはとこされまいらふ皆ちらぬうち
貞石

寄神祇花

ちらしても又結ひたき糸桜神にあゆみをかけまくの内
三次 秋榮軒楓梁

寄釈教花

花に逢ひ若き人さ急御仏に縁を結ひし糸桜かな
三次 花向

(四オ)



柳々齋貞季

三月三日

貞棧

雛祭りあかねまへたれ緋の袴在所娘もかりのおつほね

幸女

ひな祭り宮もわら屋も押なへて田舎も桃の花の都しや

草餅

可周

灸とはあちらこちらに蓬餅ひなに子供かすゑて悦ふ

桃酒

三次

月も三ツ日も三ツに三ツの盃はちやうしの揃ふけふの桃酒

雛祭

花暁

下戸たちもけふは上戸にまはりて盃の朱に染ンても、色

雛祭

花暁

花盛ちらするかせのにくやとてうち廻したる幕にや有らむ

柳々齋貞季

(四ウ)

三月三日

貞棧

雛祭りあかねまへたれ緋の袴在所娘もかりのおつほね

幸女

ひな祭り宮もわら屋も押なへて田舎も桃の花の都しや

草餅

庄原故人

可周

灸とはあちらこちらに蓬餅ひなに子供かすゑて悦ふ

桃酒

三次

花遊

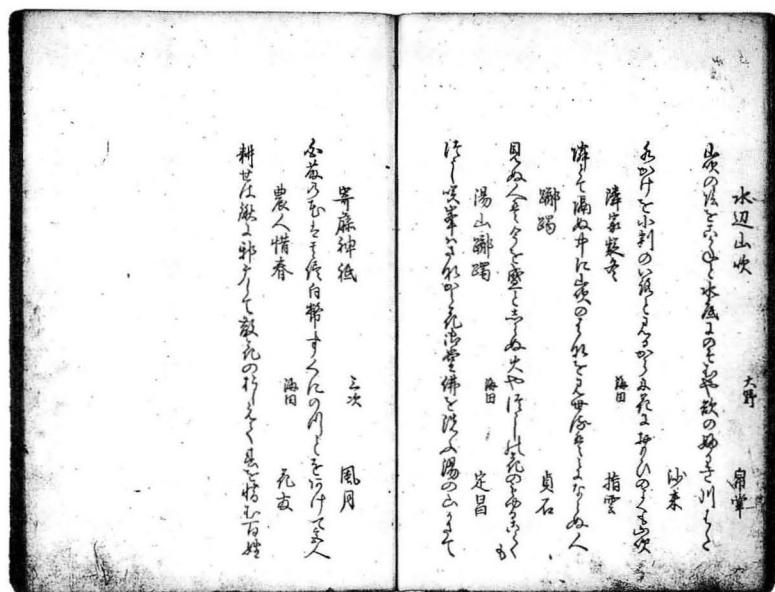
月も三ツ日も三ツに三ツの盃はちやうしの揃ふけふの桃酒

雛祭

花暁

下戸たちもけふは上戸にまはりて盃の朱に染ンても、色

(五オ)



水辺山吹

大野

帛掌

山吹の陰をこかねと水底にのそむや欲のふかき川はた

沙乗

水かけを小判のいろと見るからに花におもひのよくも山吹

隣家款冬

海田

指雲

隣とて隔ぬ中に山吹のはなを見せるはみにならぬ人

躑躅

貞石

見ぬ人は今を盛としらぬ火やつゝしの花のもゆることくも

湯山躑躅

海田

定昌

つゝし咲峰はさなから花御堂仏を洗ふ湯の山かさて

(五ウ)

寄藤神祇

三次

風月

白藤の花は其儘白幣すくにのつとをあけて宮人

農人惜春

海田

花友

耕せは鋤に邪魔して散花のおしえて春を惜む百姓

(六オ)

夏

首夏

老木さゑまた若やいて春よりは夏のかしらの青き葉桜

蚊に題して

かしましや孟夏のよとてふんく血をすふ人の耳の根に来て

若鮎

恋ならて水の出花の一盛のほるとはまたこゝろ若あゆ

芍薬に蜂のとまり

たるを見て

人毎に芍薬とよふ花なれば蜂も一はりたつるかともみゆ

百合

一嚙といふけしきには咲にけり名も鬼ゆりの口の広さよ

老人愛庭橘

袖の香のむかし床しく老の身も杖つくくと庭に橘

郭公

宵々に待ともく時鳥きかぬつらさをこつちからなこ

関路郭公

せき守ももふ空音では合点せず名乗てこゆる山時鳥

沙来

(七才)

何言

貞石

芝郷

友之

市仙

眠花

桂洲

沙来

関路郭公

沙来

な之

人毎に芍薬とよふ花なれば蜂も一はりたつるかともみゆ

百合

一嚙といふけしきには咲にけり名も鬼ゆりの口の広さよ

老人愛庭橘

袖の香のむかし床しく老の身も杖つくくと庭に橘

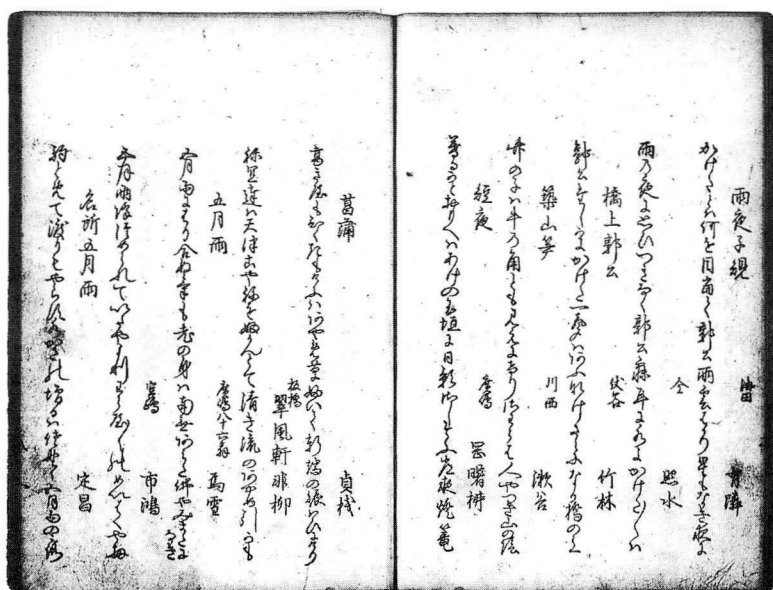
郭公

宵々に待ともく時鳥きかぬつらさをこつちからなこ

関路郭公

せき守ももふ空音では合点せず名乗てこゆる山時鳥

沙来



雨夜子規

海田

有隣

かけたとは何を目当て郭公雨雲はかり星もなき夜に

全

照水

雨の夜に思ひつきなく郭公寝耳に水よかけたくは

橋上郭公

伏谷

竹林

郭公たしかにかけた一声はあふなけさうになか橋の上

築山箒

川西

漱谷

竹の子は牛の角とも見えにけりさわらは人やつき山の陰

短夜

広島

岡曙柳

暮るかとおもへはあけの玉垣に日影さしそふ常夜灯籠

(七ウ)

菖蒲

貞棧

高き屋もひくきもけふはあやめ草ふいて軒端の賑はひにけり

板橋

翠風軒非柳

祢宜達は天つこやねをふかんとて清き流のあやめ引かも

五月雨

広島八十六翁

焉雪

五月雨にはり合ぬ氣も老の身は南無阿みた仏やみまたになき

宮島

市鴻

五月雨降つめられていたやよりわら屋くのめいはくや扱

名所五月雨

定昌

駒とめて渡りもやらす水かさの増るは佐野、五月雨の路

(八オ)

鉢枇杷

廣島

牽衣

盛上た枇杷はさすかにすすの鉢馳走ふりとはなるものぞかし

初茄子

芝郷

芝郷

誰か口にいらぬゆかりのいろにそむこひむらさきの初なすひかな

螢

市鴻

市鴻

音もなくかもなくすくな道くをおしゆる螢ひしり成らん

池螢

涼杜

涼杜

身より放つ光りに照す池の面玉もの上にとふ螢かけ

公家螢見

壬生

五嶽

五月闇照らす螢は星に似てもあそはれし雲の上人

(八ウ)

水滴

浪花故人

鉄丸

飛んで来て火にはいらすに水入にとまる螢は扱も智者かな

茶屋紅花

芝郷

芝郷

植置て錢くれないのお客をははなてあしらふ色茶やの庭

虎泪雨

貞季

貞季

うそふかは風や起らん年毎にとらか泪の雨のまことは

遊里水餅

斜竹

斜竹

水くさい流の里にかこはれてみなつき出しの水餅かな

山路にて蟬を聞て

甲山

一瓢

さひしやとおもへとつれもなくせみの声を山路の友とみんく

甲山

一瓢

一瓢

(九オ)

摺木に蝉のとまりたるを見て 楓梁
 雨されか艶のぬけたるすりこ木に蝉はとまりて吟を出しけり 貞律
 炎暑
 此あつさ一寸と見て六歩酒しふ団扇にて夏を凌かん
 せとかとく影をたつねて外廻り灸のやうに暑こらゆる 沙乗
 馬士暑 吐下
 啼て行馬の口よりむまかたの先に水かふ夏の日さかり 柳葉
 鐘樓暑 貞国
 す、風をたゝみこめたる扇にもあまるあつさや大仏の鐘
 夕立 (九ウ)
 大野 雨汀
 石臼かころくくくと夕立のはれやれふしん鳴神の音 三次 楚江
 鳴神の一たひなれは夕立の千の矢先とふりかゝるあめ
 夕立借傘 尾道 斯携
 みの壺つ持ぬとたにも夕立のかさをかり場の賤かたしなみ
 辻能過夕立 矢野 露萩
 辻能の太鼓も空に鳴神や舞の拍子もぬける夕立
 市中雷 本邑 梅青
 はちくくと算音高き市中に九々のはしたかあまる鳴神
 (十オ)

摺木に蝉のとまりたるを見
 雨されか艶のぬけたるすりこ木に蝉はとまりて吟を出しけり
 炎暑
 此あつさ一寸と見て六歩酒しふ団扇にて夏を凌かん
 せとかとく影をたつねて外廻り灸のやうに暑こらゆる
 馬士暑 吐下
 啼て行馬の口よりむまかたの先に水かふ夏の日さかり
 鐘樓暑 貞国
 す、風をたゝみこめたる扇にもあまるあつさや大仏の鐘
 夕立 (九ウ)
 大野 雨汀
 石臼かころくくくと夕立のはれやれふしん鳴神の音
 三次 楚江
 鳴神の一たひなれは夕立の千の矢先とふりかゝるあめ
 夕立借傘 尾道 斯携
 みの壺つ持ぬとたにも夕立のかさをかり場の賤かたしなみ
 辻能過夕立 矢野 露萩
 辻能の太鼓も空に鳴神や舞の拍子もぬける夕立
 市中雷 本邑 梅青
 はちくくと算音高き市中に九々のはしたかあまる鳴神
 (十オ)



庄原
桃花亭文河

雨防く

例ひき

ね

あは

ふの

け

いん

下蔭

は

い

涼

る

まよりて

可周

雨防く例ひきかへ松蔭にあつさしのかむ此ところてん

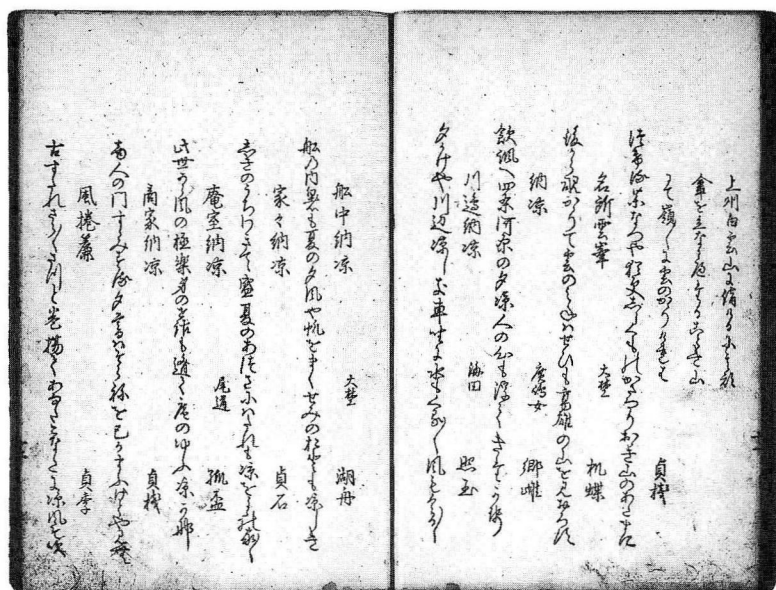
庄原 桃花亭文河

(十ウ)

立よりてみれば涼しき心太風そつきぬく松の下蔭

可周

(十一オ)



上州白雲山に詣けるに其顔傘を立ならへたることき山に
て嶺く／＼に雲のかゝりければ

貞棧

つける葉なつや猶更しらくものかさなりおゝき山のあたまに

名所雲峰

大野

机蝶

後から覗かゝりて雲のみねはせひも高雄の山を見おろす

納涼

大野

郷雌

飲風へ四条河原の夕涼人の心も浮てきたかせ

川辺納涼

海田

照玉

夕かけや川辺涼しき車坐に水もくるく／＼風もくるく／＼

(十一ウ)

船中納涼

大野

湖舟

船の内暑も夏の夕風や帆をまくせみのおとも涼しき

家々納涼

貞石

しきのうちわきて盛夏のあつさにはたれも涼をよゝの家々

庵室納涼

尾道

孤盆

此世から風の極楽身の世話も遁て庵のゆふ涼かな

商家納涼

貞棧

商人の門すゝみせる夕暮はそらねを己かまふけとや見む

風捲簾

貞季

古すたれさら／＼さつと巻揚てあなたこなたに涼風ぞ吹

(十二オ)

夏月

兆柳

ちり程な障りもいつそ夏の夜や二千里かけてみな月の空

月入蚊帳

市鴻

かきたつる行灯の世話も夏の夜の蚊屋に入たる月の有明

蚊屋の内

広島

蚊屋の内こたかに照す光りこそ布目にかけておろす月影

隣家撫子

壬生

隣から覗くあたまをなてし子や花の姿の可愛らしさに

水鶏破夢

全

うた、寝のうま／＼として夢に餅水鶏のたゝき起すにくさよ

六月盡

文友

今宵明てみるならあすは文月とゆふ顔の空や夏の封め

秋

初秋

貞園

今朝の秋風の音にも驚ぬ御代や目にしる稲の出来はええ

七夕

貞石

思はれぬ契りはつらし七夕の今宵と人に星をさゝれて

夏月

兆柳

ちり程な障りもいつそ夏の夜や二千里かけてみな月の空

月入蚊帳

市鴻

かきたつる行灯の世話も夏の夜の蚊屋に入たる月の有明

蚊屋の内

鶏口

蚊屋の内こたかに照す光りこそ布目にかけておろす月影

隣家撫子

五橋

隣から覗くあたまをなてし子や花の姿の可愛らしさに

水鶏破夢

井淵

うた、寝のうま／＼として夢に餅水鶏のたゝき起すにくさよ

六月尽

文友

今宵明てみるならあすは文月とゆふ顔の空や夏の封め

秋

初秋

貞園

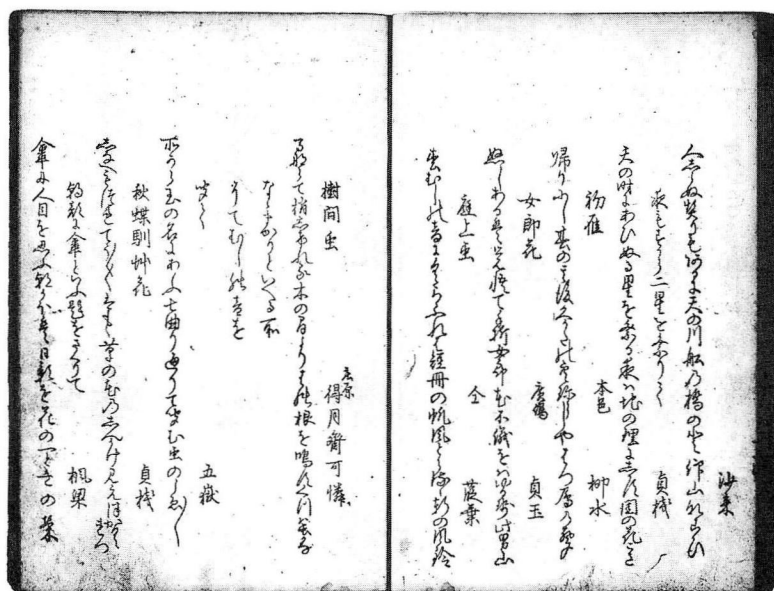
今朝の秋風の音にも驚ぬ御代や目にしる稲の出来はええ

七夕

貞石

思はれぬ契りはつらし七夕の今宵と人に星をさゝれて

(十三才)



沙来

人しらぬ契りもあるに天の川船の橋のと仰山なこひ

夜もすから二星を祭りて

貞機

天の時にあひぬる星を祭る夜は地の理にしやす聞の花こさ

初雁

本邑

柳水

帰りにし春の其後久かたの空珍しやはつ雁の声

女郎花

広島

貞玉

ぬしあるは覚悟て手折女郎花不儀をはゆるせ此男山

庭上虫

全

葭葉

松むしの音にくらふれは短冊の帆風とらる、朝の風鈴

(十三ウ)

樹間虫

庄原

得月齋可憐

馬ならて梢しける木の問よりはの根を鳴すくつは虫かな

な、まかりといへる所にてむしの音を聞て

五嶽

所から玉の名にあふ七曲り通りて聞む虫のこゑく

秋蝶馴草花

貞機

しなへもつれてうくくはも、草の花のしんかけ見えつかくれつ

朝顔に傘といふ題をさくりて

楓梁

傘に人目を忍ふ朝かはは日影を花の一ときの栄

(十四オ)

水辺野分

浅原

山螺

腰張の面かけみす朝かみや川野分の風にちるは水たま

新綿

宮島

江柳

蝶に花ともりそたてられ其後は誰かいとしことならむ新綿

鬼灯

廣島

南枝

鬼灯は鱈の山に身しりそきけんとよふのも手からものなり

瓢箪

廣島

南枝

ひやうたんや花の姿を引かへて世を秋風の垣にふら／＼

井筒桐

芝郷

芝郷

桐の木の長持となる行末を井筒によりて契れうない子

名月

霞園

芝休

天のはらにきのふはこもちけふは又ははれてかしたる三五夜の月

三夜

芝休

あり／＼と空のかゝりの面白や鞠のよふなるけふの月影

全

河陽

芋の子のね入た中を一鍬に今宵の月を見よと起せり

貞石

貞石

上にたち下にもたちて月今宵はしの人丸舟の赤人

南枝

南枝

今宵てふほうき千里も二千里もたゝはくちうといはん名月

(十五才)

負石

と
随
方

卷之六

三

のきぬ

座

三

卷

42

先石

貞樹

海人水

香

夢乃子

1

100

1

9

貞石

2024

広島

71

れた

庄原

広島

(十五ウ)

元石

清

貞棧

広島九十一

尾道

庄原

める哉

川手

不乙

橋の上にはさあられと月を月の下は一白水とりにして

月夜盗人

宮島

桂柱

くらゐ道行こ、地せん月夜にもひんの闇からおこる盗人

隣家萩

芝郷

やつと盗つた人も三度や垣越に見え萩の上風

海辺擣衣

貞石

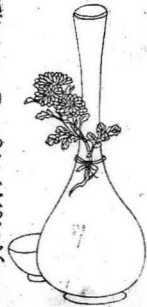
細の目休めて蟹のよもすからおきせんたゝの衣うつ也

名所擣衣

庄原

知水

のりけとねは萩の夜もすからあかしの浦にうつ槌の音



徳利滑稽なりとくくの雫は菊の下露に

かよひ彼南陽県の流も此口よりや出ぬらん折袖匂ふ

白露はうち払ふにも千代やへぬらむと行末人の

老をせく仙家のふることまで思ひ出て重陽の日

葉の酒を汲て酔中自画して書之

芝郷

けふ吞は葉ときくの酒盛は匙よりもよふまはる盃

川手

不乙

橋の上につきこほれたる望月の下は一白水とりにして

月夜盗人

宮島

桂柱

くらゐ道行こ、地せん月夜にもひんの闇からおこる盗人

隣家萩

芝郷

そつとするこゝろは人もしら浪や垣越に來た萩の上風

海辺擣衣

貞石

網の目は休めて蟹のよもすからおきせんたゝの衣うつ也

名所擣衣

庄原

知水

のり付た船に碇の夜もすからあかしの浦にうつ槌の音

(十六ウ)

徳利滑稽なりとくくの雫は菊の下露に

かよひ彼南陽県の流も此口よりや出ぬらん折袖匂ふ

白露はうち払ふにも千代やへぬらむと行末人の

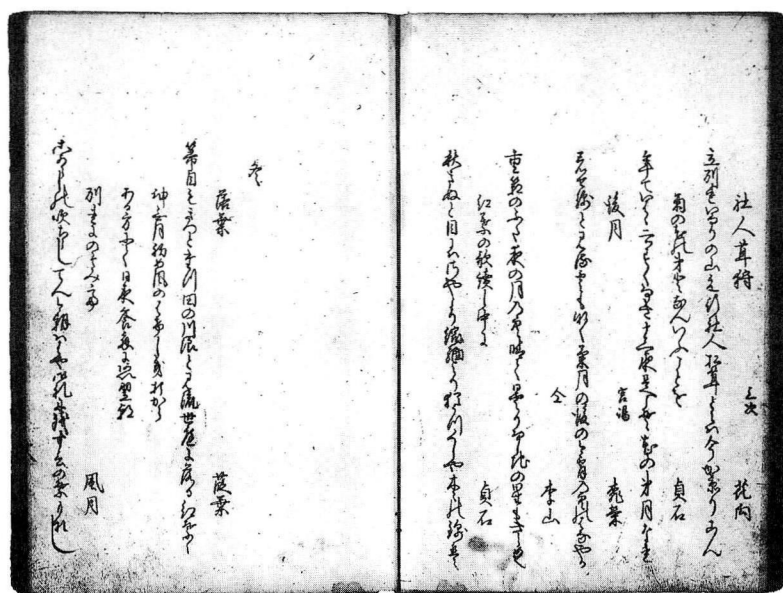
老をせく仙家のふることまで思ひ出て重陽の日

菊の酒を汲て酔中自画して書之

芝郷

けふ吞は葉ときくの酒盛は匙よりもよふまはる盃

(十七オ)



杜人茸狩

三次

花向

立別れいなりの山え行杜人松茸とらは今かゑりこん

菊の花の弟となんいふことを

貞石

年ていは、二ツすくなき十三夜是こそ花の弟月なれ

後月

宮島

桃栄

着せ綿と見る雲もなく菊月の後の今宵の空のはなやか

全

李山

重箱のふた夜の月の空晴て曇りなし地の星もきらめく

紅葉の歌読し中に

貞石

秋きぬと目にはさやより縮緬より猶うつくしや木々の錦は

(十七ウ)

冬

落葉

葭葉

箒目もきつとたつ田の川浪と見瀧世庭に落る紅葉

神無月初め風のはけしき折から

ある方にて日夜饗応にあい翌朝

別れにのそみて

風月

こからしの吹ちらしてん今朝ははや御礼に残す言の葉もなし

(十八オ)

廊時雨

春夜に松のくぐらゐを染かねて時雨廊の客さくなり

洛中時雨

さむ風の吹て座敷えきた時雨濡し畳は五しやう六しやう

船中時雨

楫枕寝てたに時雨聞頃はかけしや苦のかはく間もなし

橋霜

手の裏をかへすよふなる橋の霜朝日のあしの渡る気色は

初雪

詠やる目にもたまらて飛石のうすくくと降今朝の雪

雪

初雪の降こむ儘の面白さ窓はつめたき気色たになき

雪見

詠むれば月花よりもおもしろやとこまてもゆきく

夕雪

雪降りて富士ともみゆる草屋かた朝日のさせは煙たつ也

入相の鐘に散行花かとも夕顔にふれる雪やこんく

前栽雪

雪花もちりやたたりとヒイヤひやうかれて袖をかさすせんさい

沙乗

布川

醉隣亭柳江

貞季

貞国

芝賛

其仙

貞松

桂柱

市鴻

本載也

九

廊時雨

幾度か松のくぐらゐを染かねて時雨廊の客さくなり

洛中時雨

さむ風の吹て座敷えきた時雨濡し畳は五しやう六しやう

船中時雨

楫枕寝てたに時雨聞頃はかけしや苦のかはく間もなし

橋霜

手の裏をかへすよふなる橋の霜朝日のあしの渡る気色は

初雪

詠やる目にもたまらて飛石のうすくくと降今朝の雪

雪

初雪の降こむ儘の面白さ窓はつめたき気色たになき

雪見

詠むれば月花よりもおもしろやとこまてもゆきく

夕雪

雪降りて富士ともみゆる草屋かた朝日のさせは煙たつ也

入相の鐘に散行花かとも夕顔にふれる雪やこんく

前栽雪

雪花もちりやたたりとヒイヤひやうかれて袖をかさすせんさい

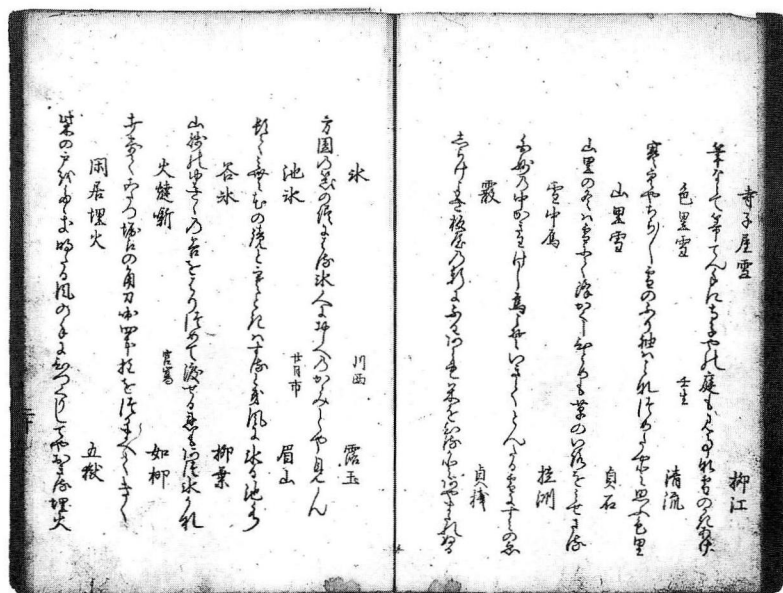
前栽雪

雪花もちりやたたりとヒイヤひやうかれて袖をかさすせんさい

前栽雪

雪花もちりやたたりとヒイヤひやうかれて袖をかさすせんさい

(十九才)



寺子屋雪

筆なくて箒てん手に寺子やの庭も見事な雪のかきあげ

柳江

色里雪

壬生

清流

寒空やちら／＼雪のふり袖はみなつめたやと思ふ色里

山里雪

貞石

山里の冬は雪にて降かくしひとめも草のいろをみせさる

雪中雁

桂洲

白妙の中かきわけし雁こそいきてとんたる雪にすみのゑ

霰

貞棧

しらけよき板屋の朝にふるあられ米をひるかとおやまたれぬる

(十九ウ)

氷

川西

露玉

方円の器の儘にはる氷人におしへのか、みとや見ん

池氷

廿日市

眉山

頓てみむ花の鏡と寒ときはするとき風に氷る池氷

谷氷

柳葉

山賤のゆき、の谷をはりそめて渡せる息もあつ氷かな

火燧嘶

宮島

如柳

打寄てこたつ堀江の角力咄四本柱をつかまへてきく

閑居埋火

五嶽

柴の戸をた、き明たる風の手にひつくりしてやおきる埋火

(二十オ)



すさまじきものときけともつのもなくはもなく見ゆる冬枯の月

貞石

(二十ウー二十一オ)



職人頭巾

廿日市

梅翁

槌を持鍛冶屋もく、り頭巾着てさすか吹草をふくの神わざ

鉢た、き

芝郷

かしましと捨たも有に瓢箪をうき世にかへてた、くとは又

社頭冬籠

貞国

水鳥の名にあふ加茂の宮居とておしの集る冬籠かな

寒梅

芝郷

十露盤の粒になる木も春またて算用なしに咲梅の花

名所年忌

海田

枝重

楽みは類ひまれなる年わすれ気も浮瀬の酒に飲れて

(二十一ウ)

煤払

貞石

煤取は家のとやくの古法かやはかして跡の心よいのは

女 雪枝

す、はらひ払ふて嬉し神心ゑひすの顔はなんほ撫ても

雪中煤掃

石州志学 杏林亭廬山

是そ此よい筆なれやす、箒かきちらさんと雪の白紙

春待乞喰

大野

洞口

お余りも大晦日は門々に腹のはるまつ暮の乞喰

歳暮

涼杜

網代木も打越して行年浪になかる、ひをはと、めかねけり

(二十二オ)

如柳

煤はいてめつた下部かはる窓に古き曆の月も日もなし

小方

李郷

鐘の数残しもおりてつき雪の名残そおしき除夜の入相

三次 一了軒未積

三次 一了軒未積

若水の田子もあらたに見かへしはわかけて年のよい暮て行

史兆

来る春をいやといはれすまつ鳥やおしまれなから暮て行年

楓子

楓子

雨のきりぎりすもみちの鳥は古巢え今帰りこん

酉の暮に

楓子

明の鐘のひ、きと共に大年の鳥は古巢え今帰りこん

(二十二ウ)

戀

戀の歌読ける中に

貞石

貞石

ふみ迷ふこひの道には足よりも手からさきにぞ思ひなし

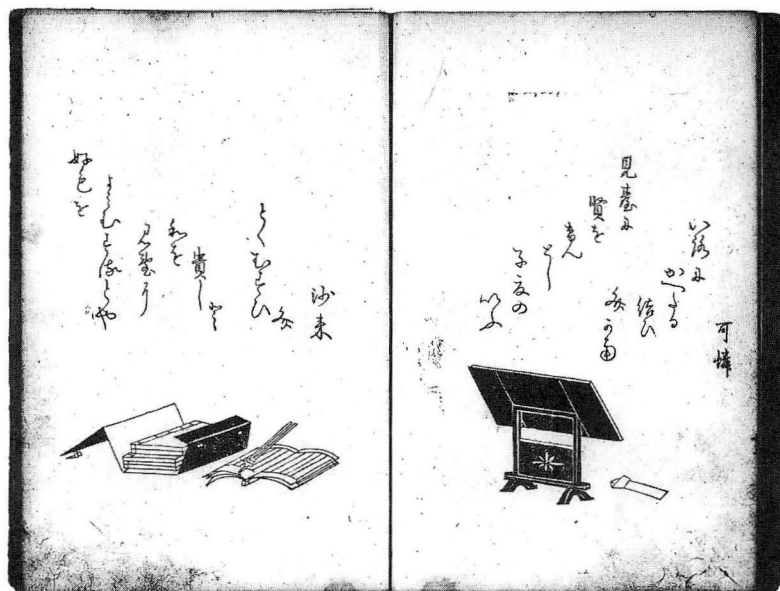
初恋

流水

流水

色外にあたら娘はまた花のつほみと見えてひもとかぬ恋

(二十三オ)



見台に賢をけんとし子友のいふいろにかへたる結び文かな

(二十三ウ)

可憐

好色をよみむするとや見台に和を貴しととくむすひ文

(二十四オ)

沙乗

増窓

貞季

胸の火のうらぐさやけぬきて天窓のよより火焼

海田

龜六

縁もゑん結ふの神につかへても心とけよと祈る宮人

未積

呉服屋のおひそめたる色なれはきてみる度に飽ぬきぬ

尾道

九毛亭鱗角

見放つは情獵人のうらはらや懷へまて入れたわしをは

番太恋

扇女

約束の時もたかへす番太郎よい拍子木と出合こひ中

川手女

花琴

寄梅恋

川手女

花琴

寄瓜恋

庄原全

棧雌

もふ味かつゐたよふてもまくら瓜双てはまた契りかねつる

寄夜恋

石州津和野

柳芽

梅は火をともしと恋の闇の夜は見えぬ姿に闇の戸迷ひ

寄謳恋

可詠

阿漕とおもひなからもしのふ三輪見つけられたら何とせう

寄鞍恋

庄原故人

富雪

なるならぬ鞍のとうそ音つれを文にはちと知せたまはれ

可詠

可詠

可詠

増窓

貞季

胸の火のこらへ袋をやけぬけて天窓の上にともす蠟燭

海田

龜六

縁もゑん結ふの神につかへても心とけよと祈る宮人

未積

呉服屋のおもひそめたる色なれはきてみる度に飽ぬきぬ

尾道

九毛亭鱗角

見放つは情獵人のうらはらや懷へまて入れたわしをは

番太恋

扇女

約束の時もたかへす番太郎よい拍子木と出合こひ中

川手女

花琴

寄梅恋

川手女

花琴

寄瓜恋

庄原全

棧雌

もふ味かつゐたよふてもまくら瓜双てはまた契りかねつる

寄夜恋

石州津和野

柳芽

梅は火をともしと恋の闇の夜は見えぬ姿に闇の戸迷ひ

寄謳恋

可詠

阿漕とおもひなからもしのふ三輪見つけられたら何とせう

寄鞍恋

庄原故人

富雪

なるならぬ鞍のとうそ音つれを文にはちと知せたまはれ

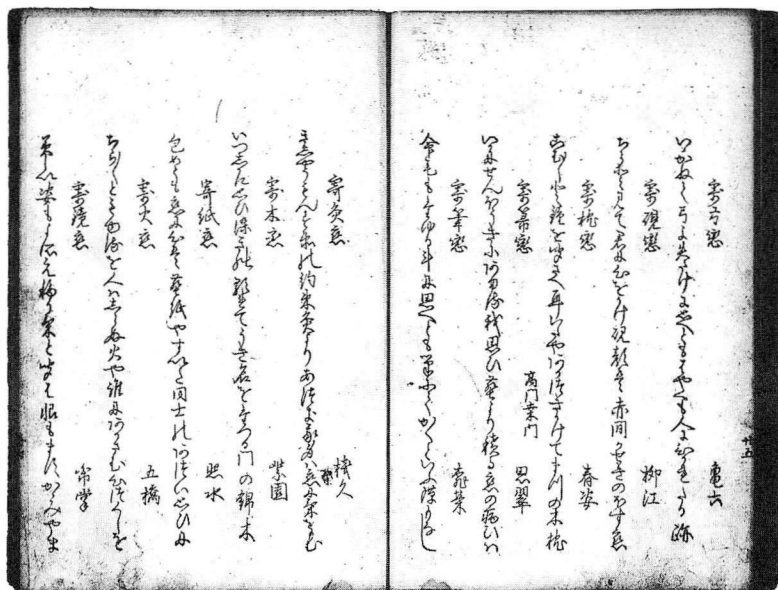
可詠

可詠

なるならぬ鞍のとうそ音つれを文にはちと知せたまはれ

可詠

可詠



寄弓恋

亀六

い、かねて弓に矢たけに思へともはやくも人にひかれたる跡
寄硯恋

柳江

ちらと見て君に心をかけ硯顔は赤間かせきのほす恋
寄枕恋

春姿

こむく鐘を聞さへ耳いたやあかつきかけてまつの木枕
寄箒恋

高門桑門

思翠

いかにせんほうきにあたる我思ひ塵より積る恋の病ひは
寄筆恋

桃栄

命もまたゆるの斗に思へとも筆にてかくといふ隙もなし
寄炎恋

(二十五ウ)

きしやうもんすゑの約束炎よりあつき我身は恋に気をもむ
寄木恋

棧久

いつしかに思ひ染きの顯れてうき名をたつる門の錦木
寄紙恋

紫園

包めとも恋に心は塵紙やすいた同士のあつひ思ひに
寄火恋

照水

ちらくともゆるを人はしらぬ火や誰にあかさむ心つくしを
寄鏡恋

五橋

美しい姿もよそえ移り氣と聞は恨もますか、みやま
寄鏡恋

帛掌

(二十六オ)

寄石恋

芝浜

石よりおもひくゝの積りては互にかたいちきりとそなる

五嶽

あふ事はかたく思へは石の火のちらと見初てわすられぬ恋

寄水恋

露遊

濡かけて契りを結ふみつしらす一河の流れ二世も三世も

寄大工恋

百歩

かねくのおもひに気をはけつりぬるなんのかんなくとく番匠

寄名所恋

広島羽隅氏女 園雌

恋中えちよつと隔のかきつはた色をうはふはにくいやつはし

(二十六ウ)

寄算盤恋

磨石

つけて置文もそろへて十露盤て合ぬ心を思案してみる

寄鉄砲恋

三次

三巴

一目見て打込恋の種かしまは袖から袖え通ふ玉章

寄三弦恋

三次

雪暁

三味線のいとはつかしやあいの手も入てみたれとはちかるゝ身は

花暁

忍ひねも度重れは人かきしつんとさはりの出来し恋中

寄徳利恋

眉山

とつくりと逢てなさけの有なしをふられなからも問てみる恋

(二十七オ)

寄算盤恋

磨石

けしきとをかもさうく十露盤て合ぬ心を思案してみる

寄鉄砲恋

三次

三巴

一目見て打込恋の種かしまは袖から袖え通ふ玉章

寄三弦恋

三次

雪暁

三味線のいとはつかしやあいの手も入てみたれとはちかるゝ身は

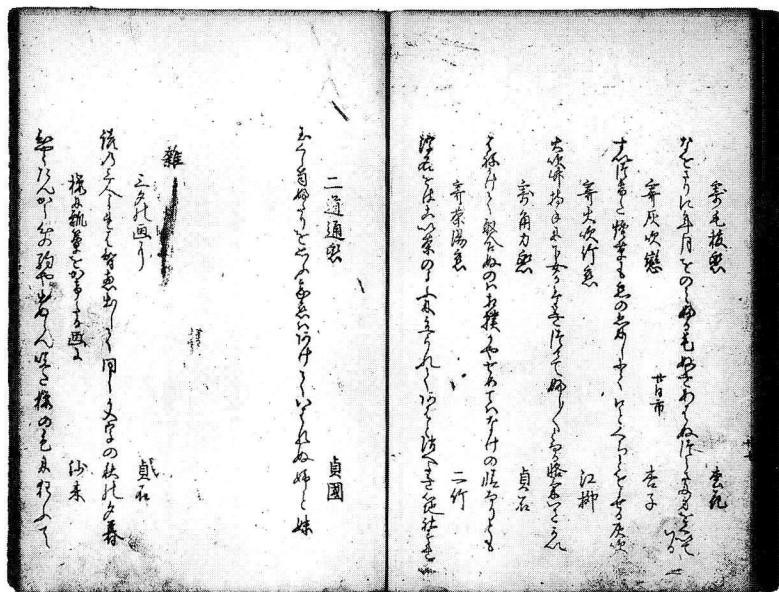
寄徳利恋

眉山

とつくりと逢てなさけの有なしをふられなからも問てみる恋

寄徳利恋

眉山



寄毛拔恋

松花

なをさりに年月をのみふる毛ぬきあはぬつらさに身をくいている

寄灰吹恋

杏子

すいつけた煙草も恋の糸にしにて口とくちとをよせる灰吹

寄火吹竹恋

江柳

火吹竹持手に下女かたきつけてふく／＼となる愀気いさかい

寄角力恋

貞石

はねかけて取合ぬのは相撲かやせぬてはなけの情なりとも

寄茶湯恋

二竹

浮名をはこい茶のよふに立られてあはと消へたき心地社すれ

(二十七ウ)

二道通恋

貞国

玉くし筒ふたりを思ふ我恋はあけていはれぬ姉と妹

雑

三夕の画に

貞石

諺の三人よれば智恵出して同し文字の秋の夕暮

桜に瓢箪をかけたる画に

沙乗

ひやうたんから心の駒や出ぬらん咲た桜の色に狂ふて

(二十八才)



女郎花に冠の画に

女郎花の前に置せし冠こそ女とは見えすおとこ山かも

貞石

可憐

むかし男それならぬけふ女郎花うゐ冠の花の出たころ

布袋の川渡りの画に

貞棧

深ふからけ浅瀬わたれと世の人に教給ふか此ほていと

傘に松茸の絵

信貫

似たものと言へはとふやらさすようてから／＼かさと笑ふまつ茸

景清の画に

貞石

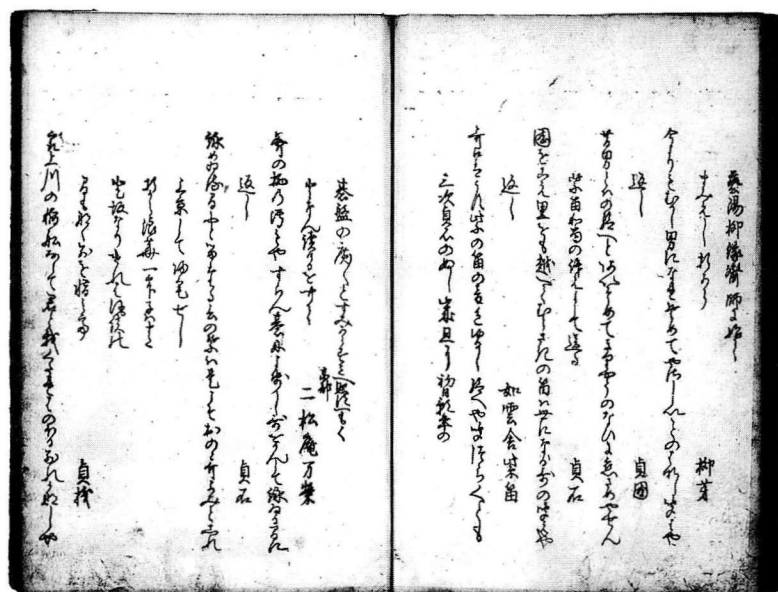
二三度は取はつしても景清は檀の浦辺に名をは残した

(二十八ウ)

みちのくのそれは石ふみ是はまた猩生舞のつほのあしふみ

貞石

(二十九オ)



春陽柳縁齋師に始てまみえし折から 柳芽

今よりもむかし男になれそめてやさしいことのはなし聞はや

返し 貞国

昔男とはの給へとあいそめてきりやうのなひに恋さめやせん

紫笛和尚の許えよらて送る 貞石

国をこえ里をも越へてむらさきの笛は世になる歌の聞えや

返し 如雲舎紫笛

歌口はうす紫の笛の音色ゆるし給へや聞つらくとも

三次貞石のぬし歳旦に初日新年の (二十九ウ)

(二十九ウ)

碁盤の広々とすみからすみへ照す一もく

となん読けるを聞て 京都 二松庵万榮

斧の柄の朽もやすらん碁によせし歌をかんして詠ぬる間に

返し 貞石

詠めぬる間ふと留たる言の葉は是こそおのゝ歌よみとしれ

上京して帰宅せし

折から浪華一雫子はまた

登坂なりければ作読の

間もなく別を惜みて 貞棧

最上川の橋船ならて君と我くたれはのほる別れかなしや

(三十オ)

ふふ乃 拾ふる



本岡貞玉

千年の齢にくらへつるならはまた嘴も足も短き

松岡貞玉

(三十ウ)

春の初に氏神に詣てけるに

松竹に鶴二羽かける画の扇を

拾ひてよみぬ

石州吉永

楚雲

まつ竹を立る門出に拾ひつるにはの扇やすゑひろの春

小川に魚きりといゑる

滝の有ければ

西城

桃林斎花牛

まな板のよふなる石に落くれは水もたまらず魚きりの滝

長者原と言ける所に

松の大木有に

全

靡風軒不識

老松にいさこととはん古は爰に長者のありやなしやと

(三十一オ)

春の初に氏神に詣てけるに

松竹に鶴二羽かける画の扇を

拾ひてよみぬ

石州吉永

楚雲

まつ竹を立る門出に拾ひつるにはの扇やすゑひろの春

小川に魚きりといゑる

西城

桃林斎花牛

まな板のよふなる石に落くれは水もたまらず魚きりの滝

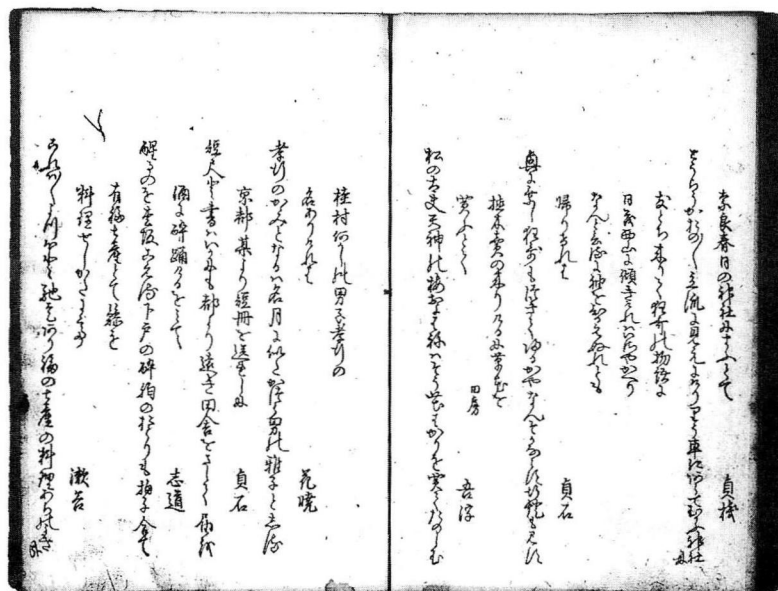
長者原と言ける所に

全

靡風軒不識

松の大木有に

老松にいさこととはん古は爰に長者のありやなしやと



奈良春日の神社にまふて

貞棧

とうらうかおの／＼立派に見えにけりりう車にあらてむかふ神社に

友とち来りて狂歌の物語に

日も西山に傾きければいさやかへり

なんと語るに袖をひかえぬれとも

帰りければ

貞石

興に乘し狂歌もつきて帰るかやなんそかならす行灯もみす

植木売の来りけるに草花を

買ふとて

田房

吾浮

松の太夫天神の梅およはねはそう花はかりを買てたのしむ

(三十一ウ)

桂村何かしの男子孝行の

名ありければ

花暁

孝行のか・みとなるは名月に似たかつら男の雅子とする

京都某より短冊を送れしに

貞石

短尺と書はいかにも都より遠き田舎をさして届を

酒に酔踊けるをみて

志道

醒るのを松坂こえる下戸の酔胸のおとりも拍子合て

有福土産とて鰯を料理せしかたにて

漱谷

これは／＼よつほと馳走あり福の土産の料理あちのよき哉

(三十二オ)

大雨の降ける夜に枕を傾けて

貞石

面白ふ聞なす軒の雫ならてことの外なる雨の音かな

眼をやみける折から灸をすゆるとて

芦水

不孝なるものこそ眼をやいたむらんすゑて給はれかうくの灸

浪花混沌軒の月次の会に

海辺孕婦といふ兼題

有ければ

貞棧

船の帆よりふくれた腹であふなやなうみきは近くはしる女は

社頭樹

宮島

似熊

くさくさの罪を糺の森の杉すくにそたつか神こゝろかも

(三十二ウ)

貞国

むさし野もなとか及はむ空々と真如の月のすめる此はら

(三十三オ)





寄紙子釈教

宮島

嘉陵

寄小刀釈教

三次

机蝶

煩悩の切れあちもよき請合は仏の御名の文殊小刀

瓜に鼠の画に

三次

路文

ちきり置く姫瓜人にとられしとよる昼ねつみ番をして居る

陰陽師里通

眠花

色里え深ふはまりて身の上もしらすに通ふ陰陽師かな

遊里将基

籬郷

かく別な客にあふては奥の手をみせるせうきの里のなくさみ

(三十三ウ)

遊女腹帯

貞国

傾城のおなかにそれとみゑの帯かたふ結むた客か有やら

寄器物無常

何言

けふありてあすはなし地の硯箱ふた度あふはしれぬ身の上

寄三弦無常

風月

三味線のいと面白さ忘れすはもしやよみみのさはり成らん

三味線を好ける人の身まかりけるに

東城

泉月

さみならぬ三筋の脈のきれはて、指にもさはりなき身いとしや

ひとりの妹なるもの

(三十四オ)

てんまう

花曉

夢にあらぬ数多き妹は娘まゝなりて
兄の身まかりけるに

秀葉

何事につけてもおもひます鏡せめて一度見たいきやうたい

或風子の七くわひ忌の

はやく立ぬるよふに

おほへて

貞棧

うかりくうつゝに暮て七とせのめぐりくるまい夢のよと川

播州湊川楠の墓え

詣けるに中奥よりかゝる廟と

未積

成けるよし縁起抔聞て

忠臣のこりかたまりししるしとて石と成たるくすのきの墓

寄草述懐

よしあしを聞もいやゝと世を捨て独居淋しよもきふのやと

寄竹述懐

老の身のひらふ歩行路につく杖の其古を忍ふ竹馬

馬士好餅

茶屋の餅もしゐられてこそくふくなほてつはらはるあちや馬かた

商人射弓

商売の役にや何のたつか弓たとへようゆう人はありとも

貞園

露玉

貞季

貞棧



拍子木破夢

松花

面白い芝居の幕を明かたの夢打破る拍子木の音

女中鍛術

文友

糸車かうなれてやら女子業くり出す手も早きくた鎗

女中喧嘩

柳葉

しつけしたいとも惜しとお物師の互につらははりめ争ひ

船中歌会

貞国

せん頭も混本も読歌の会言葉の海に乗出しては

百姓三弦

路虹

牛の綱と牽はかゆれととこやらに土けのとれぬ百姓の三味

(三十五ウ)

雲のうゑのふしは女三の宮なれやすそのに猫かたはふれて居る

貞林

(三十六オ)

山家琴

唐橋

貞桃

筏士

貞石

世渡りの道も陸ではおこなはれすうき苦勞する浪の筏士

桂洲

桂洲

世をわたる業とて木曾の山人はあらあやうしや命かけはし

山陰写水

唐橋

馬草

諏訪の海を水かゝみともするかなる富士の頭のちよつと覗ひて

婚札を賀して

貞桃

諸つはさ揃ひしけふの寿に行末も猶千代の友鶴

(三十六ウ)

大工婚礼

枝重

大工婚礼

枝重

中墨をうつて済した婚礼は未はんしやうと寿にけり

三次の里何某百壺才の寿

なるよしその聞え有ければ

文河

初老の賀に

文河

仙年賀

紫園

松の木齢を背なにおいそめて千年の坂も越む仙人

初老の賀に

甲山

当礫軒玉里

六七と祝ひかけたる九々の夢は十露盤歳の積り尽せし

(二十七ウ)



神に仕ふ人の初老の賀をよみてよと有けるに

貞国

洗米のよねの祭りはしつかりと手に取てしる老のお初穂

卒賀

広島

太瓶

三千とせの春に王母と寿かむも、にも頓て御手のと、けは

寄枕祝

市杉

豊なる御代は太平楽寝して尽ぬ果報をまつの木まくら

寄升祝

市仙

幾万と斗しられぬ貢さゑ一升ますの数積てから

女子の誕生を祝して

芝郷

(三十七ウ)

早千世のいろをもみすや針程なふた葉めてたき宿の姫まつ

(三十八オ)

星流舎先生狂歌をこのみ近里
遠郷の風人より消息此端より
来いつも本あるあふひ社中を
詠とあけあき冊なり桃の流れと
名つけけるもりうもんをこひし
たふことのなれは宜なりけらし

(三十八ウ)

やつかれも此流に枕しいやしき
口を漱きぬれは巻末のはし書を
なし石清水のきよきを濁す
事とはなりぬ

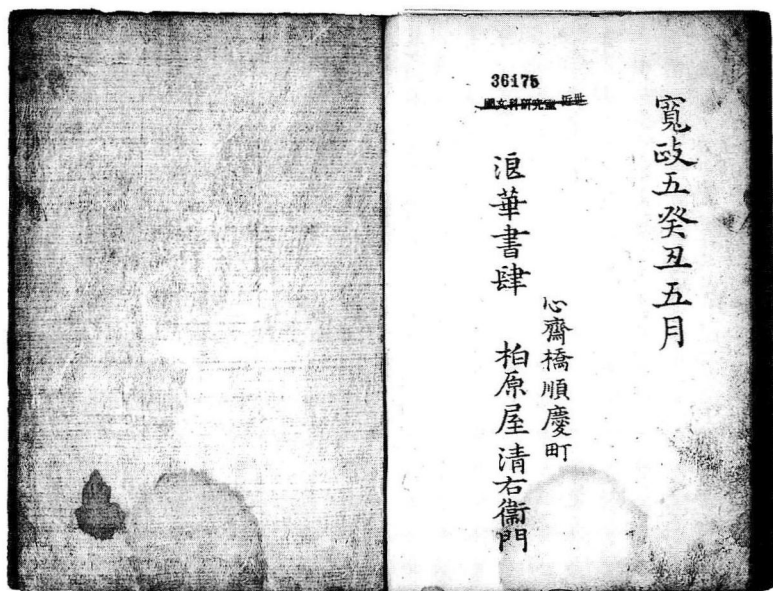
庄原

連雲齋貞棧誌

庄原 連雲齋貞棧誌

「連雲齋」印「貞棧」印

(三十九オ)

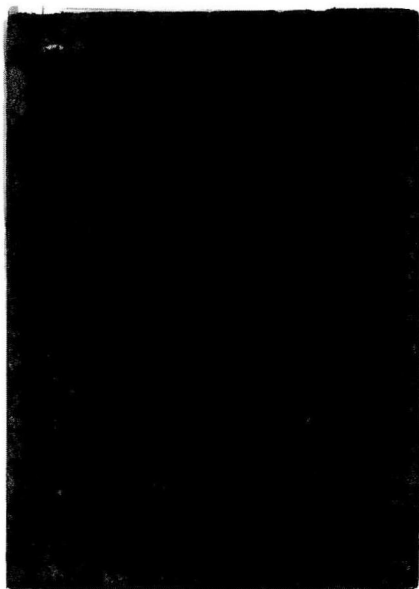


寛政五癸丑五月

心齋橋順慶町

浪華書肆

柏原屋清右衛門



(三十九ウ)

参考

地域別・入集者一覽（丁数表裏）

広島県

甲立 安芸高田市甲田町

○千歳園秀葉（一才・三四ウ）

土師 安芸高田市八千代町土師

○紅雲軒花暎（二ウ・五才・二七才・三二才・三四ウ）

小方 大竹市小方町

○李郷（二二ウ）

尾道 尾道市

○明代堂忠甫（二ウ）○斯携（二〇才）○孤盃

（二二才）

○栗市（一六才）○九毛亭麟角（二四ウ）

板橋 庄原市板橋町

○翠風軒非風（八才）

川手 庄原市川手町

○不乙（一六ウ）○花琴（二五才）

西城 庄原市西城町西城

○元礼（二才）○海鶴楼百歩（二才・二六ウ）○醉

眠齋元石（三ウ・一六才）○桃林齋花牛（三一才）

○靡風軒不識（三一才）

庄 原 庄原市本町

○連雲斎貞棧（一ウ・一ウ・四オ・五オ・八オ・一ウ・一二オ・一三ウ・一四オ・一六オ・一九ウ・二八ウ・三〇オ・三一ウ・三二ウ・三四ウ・三六オ・三六ウ・跋）○沙乗（三オ・五ウ・七オ・九ウ・一三ウ・一八ウ・二四オ・二八オ）○凌霄（三オ）○可周（五オ・一一オ・繪）○桃花亭文河（一〇オ・繪・三七オ）○得月斎可憐（一四オ・二三ウ・繪・二八ウ）○楚石（一五ウ）○棧久（一六オ・二六オ）○知水（一六ウ）○醉隣亭柳江（一八ウ・一九ウ・二五ウ）○棧雌（二五オ）○富雪（二五オ）

高 門 庄原市高門町

○思翠（二五ウ）

東 城 庄原市東城町東城

○泉月（三四オ）

浅 原 甘日市浅原

○山螺（一四ウ）

大 野 甘日市大野

○帛掌（五ウ・二六オ）○雨汀（二〇オ）○机蝶（二一ウ・三三ウ）○湖舟（二二オ）○洞口（二三オ）

甘日市 甘日市市甘日市

○眉山（二〇オ・二七オ）○梅翁（二二ウ）○杏子（二七ウ）

宮 島 甘日市市宮島

○桃栄（三オ・一七ウ・二五ウ）○市鴻（八オ・八ウ・一二ウ・一九オ）○江柳（二四ウ・二七ウ）○桂柱（二六ウ・一九オ）○李山（二七ウ）○如柳（二〇オ・二三ウ）○似熊（三三ウ）○嘉陵（三三ウ）

広島 広島市

○桃縁斎貞佐（口絵）○石丈園芝郷（序・一ウ・六ウ・八ウ・九オ・一四ウ・一四ウ・一六ウ・一七オ絵・二一ウ・二一ウ・三七ウ―三八オ）○柳縁斎貞国（一オ・九ウ・一三オ・一八ウ・二一ウ・二八オ・二九ウ・三三オ絵・三四オ・三五オ・三五ウ・三七ウ）○筑波（一ウ）○流水（二ウ・二三オ）○其扇（三オ）○貞律（三ウ・九ウ）○幸女（五オ）○何言（六ウ・三四オ）○市仙（七オ・三七ウ）○桂洲（七オ・一九ウ・三六ウ）○曙柳（七ウ）○焉雪（八オ）○牽衣（八ウ）○涼杜（八ウ・二二オ）○郷雌（二一ウ）○鶏口（二二ウ）○文友（二三オ・三五ウ）○貞玉（一三ウ・三〇ウ絵）○葭葉（二三ウ・一八オ）南枝（一四ウ・一五オ）○霞園（二五オ）○曙山（二五ウ）○清交（一五ウ）○斜月（一六オ）○扇女（二四ウ）○園雌（二六ウ）○貞桃（三六ウ）○写峰（三六ウ）○太瓶（三七ウ）

伏谷 広島市佐伯区湯来町伏谷

○竹林（七ウ）

矢野 府中市上下町矢野

○露菰（一〇オ）

府中 府中市府中町

○鹿声軒信貫（三ウ・二八ウ）

三原 三原市

○其仙（一九オ）

三次 三次市

○星流舎貞石（一オ・一ウ・二オ・二オ・三オ・三ウ・四オ・五ウ・六ウ・一二オ・一三オ・一五オ・一五ウ・一五ウ・一六ウ・一七ウ・一七ウ・一九ウ・二〇ウ―二一オ絵・二二オ・二三オ・二七ウ・二八オ・二八ウ・二八ウ・二九オ絵・二九ウ・三〇

オ・三一ウ・三二オ・三二ウ・三六ウ) ○史兆(一
オ・二二ウ) ○霜柳(二オ) ○秋榮軒楓梁(四オ・
九ウ・一四オ) ○花向(四オ・一七ウ) ○花遊(五
オ) ○風月(六オ・一八オ・三四オ) ○楚江(一○
オ) ○芝休(二五オ) ○河陽(一五オ) ○了軒未
積(二二ウ・二四ウ・三五オ) ○三巴(二七オ) ○
雪曉(二七オ) ○路文(三三ウ)

海 田 安芸郡海田町

○磨石(四オ・二七オ) ○指雲(五ウ) ○定昌(五
ウ・八オ) ○花友(六オ) ○有隣(七ウ) ○照水
(七ウ・二六オ) ○照玉(一一ウ) ○枝重(二一
ウ・三七オ) ○亀六(二四ウ・二五ウ)

甲 山 世羅郡世羅町甲山

○一瓢(九オ) ○当礫軒玉里(三七オ)

壬 生 山県郡北広島町壬生

○眠花(七オ・三三ウ) ○五嶽(八ウ・一四オ・二
オ・二六ウ) ○五橋(二二ウ・二六オ) ○井淵
(二二ウ) ○清流(一九ウ)

川 西 山県郡北広島町川西

○漱谷(七ウ・三二オ) ○露玉(二二オ・三五オ)

田 房

○吾浮(三一ウ)

吐 下

○柳葉(九ウ・二〇オ・三五ウ)

本 邑

○梅青(一〇オ) ○柳水(二三ウ)

島 根 県

石州志学 大田市三瓶町志学

○杏林亭廬山（二二才）

石州津和野 鹿足郡津和野町

○柳芽（二五才・二九ウ）

石州吉永 大田市大田町吉永

○楚雲（三一才）

京都府

京都 京都市

○二松庵万栄（三〇才）

兵庫県

播州高砂 高砂市

○布川（一八ウ）

大阪府

浪花 大阪市

○試枝（二ウ）○鉄丸（九才）○如雲舎紫笛（二九ウ）

不記載

○竹習（二ウ）○桃葉（三ウ）○柳々齋貞季（四ウ）
絵・九才・一二才・一八ウ・二四ウ・三五才）○友
之（七才）○斜竹（九才）○兆柳（一二ウ）○芝賛
（二九才）○貞松（一九才）○雪枝（二二才）○楓
子（二二ウ）○可詠（二五才）○春姿（二五ウ）○
紫園（二六才・三七才）○芝浜（二六ウ）○露遊
（二六ウ）○松花（二七ウ・三五ウ）○二竹（二七
ウ）○志道（三三才）○芦水（三二ウ）○籬郷（三
三ウ）○芦舟（三四ウ）○路虹（三五ウ）○市杉
（三七ウ）

おわりに

浪花の油煙斎貞柳に師事し、その高弟として知られた備中笠岡出身の芥河貞佐が、享保十三年（一七二八）に広島
 の芥河家七代目を嗣いで以来、芸備の「柳門」の中心となって活躍した。宝暦九年（一七五九）正月『狂歌千代のか
 けはし』が公刊された。板元は、「廣嶋 播磨町 本屋仙助／浪花 南久宝寺町心斎橋筋少東 伊丹屋佐助」の相板
 である「初板本奥付」。相板とはいえ広島での出版として注目すべきである。安永六年（一七七七）春には、『狂歌寐
 さめの花』が刊行された。撰者は芥河貞佐、序文を広陵 扇縁斎貞中、跋文は石丈蘭芝郷である。以来、何度か板を
 重ね、天明六年（一七八六）秋には、貞佐の門人玉雲斎貞右の息、尼屋貞治郎らによって攷板されている。寛政五年
 （一七九三）五月、三次の星流舎貞石は『狂歌桃のなかれ』を公刊した。「狂哥桃のなかれ 一冊／撰者 貞石（備
 後）／板元 柏原屋清右衛門（順慶町五丁目）／出願 寛政五年六月／許可 寛政五年七月二十五日」（『享保以後大阪
 出版書籍目録』一四二頁）とある。序文は広島石丈蘭芝郷、跋文は庄原の連雲斎貞棧、版元は、浪花 心斎橋順慶
 町 柏原屋清右衛門である。寛政期の芸備狂歌壇をすべて網羅している訳ではないが、芸備の狂歌が芥河貞佐の流れ
 を継承していることが知られる。安永期の『狂歌寐さめの花』から寛政期を経て次世代の柳縁斎「栗本軒」貞国の晩
 年になる『狂歌家の風』^{（注10）}「享和二年（一八〇二）正月刊」へと引き継がれていく過程を知る資料として価値があると
 考えられる。

『狂歌桃のなかれ』に関しての論考は今後の課題とした。

注

1 桃縁斎貞佐（二六九九～一七七九）拙稿「芥河貞佐」（『日本古典文学大辞典』第一卷三〇頁 岩波書店 一九八三年十月二十日発行）。他に、論考や地方史などに多くの資料がみられる。

2 星流舎貞石 三次住。経歴未詳。

3 石丈蘭芝郷 広島住。通称 野村屋与市。桃縁斎貞佐の高弟。貞佐没後、芸備狂歌壇で指導者として活躍した。

4 連雲斎貞棧 庄原住。星流舎貞石の門弟。

5 『新板願出印形帳』第七冊・大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』第十四冊 一九六頁 平成元年三月三十一日発行。

『開板御願書扣』第二十二冊・大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』第十七巻 二九一頁 平成四年三月三十一日発行。

6 『狂歌桃のなかれ』の序文に「雪月花の詠を撰て一卷となしこれを桃の流となむ号けるも師の陰を汲人のうたを集し名なるへし」とある。

7 『狂歌千代のかけはし』『享保以後大阪出版書籍目録』四九頁に「狂歌千代の梯 一冊／作者 芥河屋久兵衛（廣島）／板元 伊丹屋佐助／出願 宝暦九年二月」とある。後板は、「書林／廣嶋 平田屋町 柏原屋平七／浪花 心齋橋筋 柏原屋佐兵衛」である。

8 『狂歌寐さめの花』刊記に「七十九翁桃縁齋芥河貞佐選蔵梓」とあるところから推論するに、貞佐の七十九歳の明和六年に稿本ができたが出版されなかった。貞佐の没後直ちに追善の配り本として安永六年春に出版された

ものと考えられる。撰者は芥河貞佐、序文は広陵・扇縁齋貞中、跋文は石丈蘭芝郷、刊記に板元の記載がなく、口絵が「六歌仙の肖像に由縁齋貞柳翁の狂歌」である。『享保以後大阪出版書籍目録』一〇七頁に「狂歌寐覺の花 一冊／板元 本屋新右衛門／右板元よりの申出でを本屋行司にて聞届け板行／申出年月 安永七年十二月十二日」とある。安永七年に、改めて本屋行司に届け出て公刊したと考えられる。板元は大坂 本屋新右衛門と錦屋七兵衛で、口絵は「蓬萊飾りに桃縁齋貞佐の狂歌」となっている。他に、寛政四年板があるようだが未見。天明六年秋には、貞佐の高弟玉雲齋貞右の息、尼屋貞治郎らによって攫板された。

*拙稿「玉雲齋貞右の書誌」(『羽衣学園短期大学紀要』第二十二号 昭和六十二年三月十日刊)参照。

9 柳縁齋「栗本軒」貞国 広島水主町住、屋号苦屋、通称弥三兵衛、天保四年(一八三三)二月二十三日、八十歳没、諡号、本譽快樂貞國良安信士。天神町教念寺に葬る。

*倉田每允「栗本軒貞國の狂歌」(『尚古』第参年第八號 一六〇一九頁・広島尚古會・明治四十一年十一月十日發行)・倉田每允「名家墳墓(第二十回)・(百五十六) 栗本軒貞國」(『尚古』第参年第四號 三三三頁・広島尚古會・明治四十一年七月十日發行。他に地方史などに多くの資料が見られる。

10 『狂歌家の風』『享保以後大阪出版書籍目録』一七四頁に「狂歌家之風 一冊／作者 貞國(藝州廣島)／板元 譽田屋伊右衛門(博勞町)／出願 享和元年九月／許可 享和元年十二月七日」とある。栗本軒貞國 詠、序文は柳園の井蛙、跋文は杏園齋、板元は藝州廣島中島本町 世並屋伊兵衛・同 播磨屋町 大黒屋吉兵衛・大阪心齋橋博勞町 譽田屋伊右衛門「奥付」である。刊記は、享和元年九月板と享和二年正月板とがある。

慶応義塾図書館蔵本の調査は、佐藤悟氏による。

広島大学大学院文学研究科日本史学研究室蔵本の調査は、久保田啓一氏による。両氏に深謝申し上げます。
影印・翻刻には、実践女子大学図書館のご許可をいただいた。記してお礼申し上げます。
ご斧正、ご示教を賜りますようお願い申し上げます。